Ⅱ　2024年度博士後期課程科目別ガイド

教育学研究特殊科目（ＲＴ科目）

科目コード	016100
科　目　名	授業特殊研究Ａ（歴史・理論）
担 当 教 員	廣嶋龍太郎

●テーマ　「先人の教育思想から自身の教育観を形成する
　　―フレーベルの生涯と教育思想研究をきっかけに」

私たちが「教育」について考える時、その多くは各自の教育体験を土台としています。教育という行為は人と人の関係の中で生じるものであり、そこには個別の体験に由来する多様な考え方が見出されることでしょう。しかし、「教育の歴史・理論」を考えるときには、教育体験に共通するような「価値」や「意味」もしくは体系立った「論理」が求められることになります。

教育の歴史については、古代ギリシャにまでさかのぼることができますが、この科目では学校における「授業」という概念が広く共有されるようになった近代以降を対象として、教育思想の特徴を理解したいと考えます。

近代の代表的な教育思想の一つとして、子どもを中心とした教育観の展開を容易に指摘することができるでしょう。「子どもの視点から教育を考える」ことの重要性を強調し、後世に深い影響を及ぼした思想家については教育の歴史で頻繁に取り上げられますが、個々の人物の生涯や著作について触れたものを精読する機会はあまり多くありません。そのため、彼らがどのような経緯をたどって教育思想を抱くに至ったのかを詳しく検討することで、それらの思想の形成について理解してもらいたいと思います。

児童中心主義の教育観の系譜はルソーを一つの起点とし、ペスタロッチ、フレーベル、エレン・ケイ、デューイ、モンテッソーリらがこれに連なります。また、日本でも大正自由教育運動の教育思想家たちはこの影響を受けています。この中でフレーベルに注目して、その生涯を追いながら教育思想を理解してもらいたいと思います。

●研究の視点

（１）時代背景の理解

フレーベルの思想形成の土台となる時代の政治、文化、社会などの影響について、各自の関心に応じて多様な観点から理解する。

（2）原典となる資料の読解

フレーベルの教育思想について、代表的な古典資料を読解する。

（3）現在の教育的論点との関連

思想家たちのどの論点が現在の教育的論点に関連しているか考察する。

（4）自身の教育観と対比する

教育思想家の生涯について学ぶことを通じて、自身の教育観について再考する。

●レポート課題と学習ポイント

課題1　フレーベルの教育思想の要点をまとめた上で、それに対する自分の考えを述べなさい。

フレーベルの生涯や彼の生きた時代の歴史的背景を踏まえて論点をまとめ、自身の考えを示してください。テキストとしては、初期の代表的な伝記であるプリューファーの『フリードリヒ・フレーベル―その生涯と業績―』を選びました。プリューファーの書はフレーベル研究の古典の中でも代表的なもので、今日のフレーベル研究においても参考にされる文献の一つです。フレーベルに近い時代を生きた著者による同書を読み進めると難解な表現もあるかと思いますが、個別の用語にとらわれるよりも、まずは全体を通読し、自身の興味がある点を中心にまとめていきましょう。残り2冊のテキストは、本課題を作成するうえで参考になると思います。

特に、テキスト『フレーベル教育学研究―父性と母性：ユング心理学の観点から―』は、フレーベルの研究史を丹念に整理しつつ、国内外の文献にあたって整理された研究書です。フレーベルの教育思想研究を進める上での基本的な文献となることが期待される書ですので、ここで示された内容を、更なる探究の材料として検討して下さい。なお、第Ⅲ部「父性と母性」については、やや難解な精神史を含みますので、これらを検討する場合は本ガイドブックの「参考資料」も併せてご覧ください。人物が教育的な思想を形成するうえでは、時代背景の影響や特徴的な体験が土台になります。フレーベルにおいては、牧師の家に生まれた出自、ペスタロッチの学園における教育体験、ナポレオン戦争への従軍、自ら運営するカイルハウの学園の教育実践などを経て、今日に通じる幼稚園教育の理念へとたどり着きます。単に教育思想をまとめるだけでなく、その背景を踏まえることで、より深い理解に至ることを期待します。

課題2　現代の日本社会における教育的課題を任意にとりあげ、その概要を説明した上で、自分の考察を自由に展開しなさい。

教育思想家たちの考え方を、そのまま現在の日本社会の教育的課題に適用することは、時代や地域などの条件も異なり、いうまでもなく困難ですが、現実の教育問題を考えていく手がかりが多く見いだされるでしょう。

そこで、教育思想家の思想形成を学んだことを前提に、各自の関心に応じて、「教育を考える」という作業を課題とします。レポート作成者の教育的体験を前提とする場合は、課題1でたどったような時代的背景や教育的体験の意義を参考に、自身の教育観を論じてください。また、体験によらずとも、ペスタロッチやフレーベルを土台にすれば、今日の特徴的な教育課題として子育てをめぐる諸問題（共働き、少子化、過保護、核家族など）、や教師養成の問題な

どをとりあげることできるでしょう。他にもテキスト『教育思想史』に登場する多様な思想家からは、様々な教育的課題を考察するきっかけが得られるでしょう。当該テキストは 2009 年の出版ですが、今日に至る教育思想研究の起点となる書ですので、各自の課題意識を深化させるためのきっかけとして今日的な課題と関連付けて論じてみてください。

●使用テキスト

（1）ヨハネス・プリューファー『フリードリヒ・フレーベル―その生涯と業績―』東信堂、2011 年

（2）豊泉清浩『フレーベル教育学研究―父性と母性：ユング心理学の観点から―』川島書店、2014 年

（3）今井康雄編『教育思想史』有斐閣、2009 年

●参考文献

（1）小笠原道雄『フレーベルとその時代』玉川大学出版部、1987 年

（2）小笠原道雄『フレーベル』清水書院、2000 年

（3）日本ペスタロッチー・フレーベル学会編『増補改訂版　ペスタロッチー・フレーベル事典』玉川大学出版部、2006 年

（4）ウィリアム・H・キルパトリック『フレーベルの幼稚園の原理―批判的検討』東信堂、2020 年

（5）小笠原道雄『原典資料の解読によるフリードリヒ・フレーベルの研究 国際化の視点からみるフレーベルの思想・制度・実践に関する考察』福村出版、2021 年

（6）乙訓稔編著『教育の論究』改訂版、東信堂、2008 年

（7）豊泉清浩『フレーベル教育学入門―障害と教育思想―』川島書店、2017 年

科目コード	016200
科　目　名	授業特殊研究Ｂ（実践・評価）
担 当 教 員	鄭谷心

●テーマ　「我が国における教育課程と評価の歩み」

本科目では、第二次大戦後の我が国の教育課程と評価を関連付けながらその歩みを振り返るとともに、現状と課題について検討することにします。

学校における教育の実践と評価には、国が定める教育課程の基準である学習指導要領と指導要録における評価の考え方や方法が大きな影響を及ぼします。そこで、戦後の各時期における学習指導要領の改訂の考え方や指導要録の評価の特質を辿って今日に至る経緯を把握し、これから求められる教育における評価の在り方について考えていきます。

研究に当たっては、社会の変化等に伴う、学校教育が目指すものや教育の実践面で求められる工夫の変遷との関わりに留意しながら、評価の考え方や方法はどのようなことに重点が置かれるようになったのか、それらの課題は何か、これからどのような方向を目指すべきかについて検討していただきたいと思います。

なお、評価については、評価に求められる役割、目標に準拠した評価（絶対評価）・集団に準拠した評価（相対評価）・個人内評価のそれぞれのメリット・デメリット、観点別学習状況の評価と評価規準等の工夫、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価などの評価方法の工夫、これらを含めた指導と評価の計画の作成などについての具体的な検討が重要になります。

●研究の視点

（１）各時期の学習指導要領の改訂の考え方や特質

（２）各時期の指導要録の改訂の考え方や特質

（３）（１）と（２）の関連

・「新しい学力観」と観点別学習状況の評価

・「生きる力」と目標に準拠した評価の一層の重視

・資質・能力の３つの柱、学力の三つの要素と評価の改善　など

（４）授業評価とカリキュラム評価

（５）評価に関する研究と実践の経緯と動向

・到達度評価

・形成的評価

・パフォーマンス評価、ルーブリックの作成

・ポートフォリオ評価

・自己評価、相互評価　など

●レポート課題と学習ポイント

課題１　我が国の学習指導要領の変遷と関連付けながら各時期の指導要録にみる評価の特質について論じなさい。

我が国における指導要録の位置付けや内容に着目し、学習指導要領の改訂との関連にも目を配りながら、それぞれの時期における評価の在り方の特質について検討してください。例えば、①個々の児童生徒の指導上必要な原簿としての学籍簿（昭和 23）に始まり、昭和 30 年の改訂で指導及び外部に対する証明等の原簿となった、相対評価中心の頃における教育効果の測定の考え、②昭和 50 年代に入ってからの学習到達度評価の提唱や指導要録の改訂以降、相対評価へのかげりがみられるようになるにつれ、教育の実践の改善につなげようとする動きの加速といったように、時期の区分を設け、それぞれの特質を解き明かすことが期待されます。

課題２　今日における目標に準拠した評価を中心とした評価の考え方や方法について検討した上で、今後の評価の在り方について論じなさい。

今日、指導要録の評価では目標に準拠した評価が中心となり、個人内評価や集団に準拠した評価を必要に応じて組み合わせることができるようになっています。これらのメリット・デメリットを押さえた上で、これからの教育の方向性とも重ね合わせながら評価をどのように改善していくべきかについて述べてください。

これからの評価の考え方や方法を考えるためには、これまで取り組まれてきている、観点別学習状況の評価の推進と評価規準等の工夫、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価といった評価方法の工夫、評価計画も含めた単元指導計画の作成などに目を向けることが大切です。その際、これからの教育における評価が果たすべき役割についてしっかりした考え方をもち、それを見失わないよう留意してください。

なお、平成 29･30 年改訂の学習指導要領を踏まえた学習評価や指導要録の在り方については、中央教育審議会教育課程部会の報告や文部科学省の通知が示されていますので、これも手がかりにしてください。

●単位修得試験の評価基準

研究の視点を踏まえ、調べ、考察を行っていること。

論旨を明快に示し、理由や根拠をもとに論理的にまとめられていること。

テキスト等を手がかりにして、著者の意見と自分自身の意見を区別して論述すること。

●使用テキスト

（１）吉冨芳正編　『現代教育課程入門』　明星大学出版部　2019

（２）高浦勝義　『指導要録のあゆみと教育評価』　黎明書房　2011

（３）無藤隆ほか『新指導要録の解説と実務　中学校』図書文化社、2019 年

●参考文献

（１）学校教育や学習指導要領の変遷に関する参考文献

ア　文部科学省『学制百五十年史』『学制百二十年史』『学制百年史』

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/1420041_00011.htm
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318221.htm
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm
イ　国立教育政策研究所「学習指導要領データベース」
http://www.nier.go.jp/guideline/
ウ　中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』平成 28 年 12 月 21 日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm
エ　水原克敏『学習指導要領は国民形成の設計書Ⅷ〔増補改訂版〕その能力観と人間像の歴史的変遷』　東北大学出版会　2017

（２）文部科学省等が示した学習評価や指導要録に関する参考文献

ア　中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会『児童生徒の学習評価の在り方について（報告）』（平成 31 年 1 月 21 日）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1412933.htm
イ　文部科学省初等中等教育局長通知「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（平成 31 年 3 月 29 日）
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1415169.htm
ウ　国立教育政策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html
エ　文部科学省「平成 29･30･31 年改訂の学習指導要領下における学習評価に関する Q&A」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/qa/1421956.htm
オ　以前の学習評価・指導要録　関係報告・通知等（平成 22 年学習指導要領改訂）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1304432.htm

（３）評価の考え方や歴史、方法に関する参考文献

ア　浅田匡、古川治『教育における評価の再考―人間教育における評価とは何か―』ミネルヴァ書房　2021
イ　田村学『学習評価』東洋館出版社、2021 年
ウ　田中耕治『人物で綴る戦後教育評価の歴史』三学出版　2007
エ　田中耕治『新しい教育評価の理論と方法［１］［２］』日本標準、2002
オ　天野正輝『教育評価史研究』東信堂　1993
カ　西岡加名恵『「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価　アクティブ・ラーニングをどう充実させるか』明治図書　2016
キ　松下佳代『パフォーマンス評価―子どもの思考と表現を評価する―』日本標準ブックレット No.7　2007
ク　高浦勝義　『ポートフォリオ評価法入門』　明治図書　2000
ケ　堀哲夫『新訂一枚ポートフォリオ評価 OPPA　一枚の用紙の可能性』東洋館出版社 2019

科目コード	016300
科　目　名	授業特殊研究Ｃ（情報教育）
担 当 教 員	今野貴之

●テーマ　　「情報教育の課題を乗り越えるための研究デザイン」

近年、情報通信技術（Information and Communication Technology 以下 ICT）が進み、情報や知識が日常生活や社会生活の基盤をなす知識基盤社会といわれています。このような社会において学校教育、生涯教育、企業内教育などの教育システムが、従来の教室型から、遠隔であっても双方向性のやり取りができる学習体系に変わってきました。

一方で、授業を行う教授者側の準備が整っていないことや、学習者の学習特性に対応できるような学習環境を満たし得ていない状況が問題視されています。

これら諸課題の解決には ICT を単に用いた教育だけではなく、人々の多様なニーズを充たすため、時間や場所を選ばない教育システムを効果的に実践するための方法やその学習環境を設計・実施・評価していくことが求められています。さらに、ICT の活用が学習や子ども達に与える精神的、心理的な影響、情報モラル教育などの観点の議論も進められなければならない状況もあります。

以上のような観点から、本科目においては、知識基盤社会における教育システムを主軸として、それらにかかわる知識・認識の本質、構造、方法など、観点を明確にして ICT を活用した授業設計をすること、および、そのような授業における課題を導き出します。加えて、課題をもとに研究目的や研究方法を検討することなど、教育における ICT の活用に関する基本理念と研究デザインを扱っていきます。

●研究の視点

(1)　知識基盤社会の特徴と教育への影響
(2)　情報教育の理念
(3)　情報通信技術の教育ツールとしての有効性と限界
(4)　教育システムの分析、評価
(5)　教授者の対応、事例研究
(6)　知識基盤社会の子ども達への精神的、心理的影響
(7)　認識論の理解とメタアプローチ
(8)　情報教育の課題とその研究デザイン

●レポート課題と学習ポイント

課題１　情報通信技術を活用した授業の考え方、授業計画、進め方等を自身が依拠する認識論の立場を明確にしてまとめなさい。

知識基盤社会おける双方向性の学習体系では、知識をつたえることのみに終始するのではなく、人と人の関係性の中で知識を構築することも重視されてきました。このような状況における研究という行為は、認識主体としての研究者がこの状況（世界）をどのように捉えるのかで変わってきます。

本課題について論じるためには、以上の事項を踏まえつつ、以下の３つの観点をまじえてテキスト及び参考文献を読みこみ、学習を深めることが望まれます。

第１に、認識論についての理解を深め、自身の考え方はどのアプローチに依拠するかを明確にする必要があります。自己のメタアプローチ（ヒュポダイム）を自覚することは博士論文執筆にも重要なポイントとなります。なお、人と人の関係性の中で知識を構築するようなことのみが唯一の学習体系ではないため、テキストおよび参考文献を読み込み自身の研究テーマとの関連の中で自身のメタアプローチを明確にすることが重要です。

第２に、知識基盤社会における情報教育の位置付けを明らかにする必要があります。知識基盤社会において求められる資質のひとつとして、情報活用に関する基本的な能力である情報リテラシーがあります。これは学校教育にとどまらず、生涯教育、企業内教育などにおいても重要な意味を持ちます。さらに教授者に求められる資質のひとつとして ICT 活用指導力があげられています。以上のことから、知識基盤社会において求められる資質を従来の教育内容と合わせて整理した上で、どのような情報教育をいかに進めるかについて考察してください。

第３に、自身が依拠するメタアプローチから情報通信技術を活用した情報教育の考え方、授業計画、進め方などを整理してください。特に、情報教育の考え方、授業計画、進め方の利点や欠点を整理したり、教授者や学習者はそれぞれどのように位置付けたりするのかなどをテキストや参考文献に留まらず調べ、考察する必要があります。

以上の３観点をもって課題に取り組むと同時に、適宜、参考文献や先行研究を用いて理由と根拠を示して論じてください。

課題２　ICT を用いた教育実践の事例をひとつ挙げた上で、研究上の問いを明確にしなさい。さらにその研究上の問いから研究目的を設定し、対応する研究方法をまとめなさい。

ICT を用いた教育実践研究は学校教育のみではなく生涯教育や企業内教育といった成人を対象としている研究もあります。本課題について論じるためには、以上の事項を踏まえつつ、以下の３つの観点をまじえてテキスト及び参考文献を読み込み、学習を深めることが望まれます。

第１に、自身の研究テーマに近い領域から、ICT を用いた教育実践に関する論文をいくつか選び、研究上の問いを整理してください。テキストや参考文献には情報教育関連の論文や専門書が示されており、それらに関連した論文や学術書などを検索するのがよいでしょう。研究上の問いはリサーチクエッションとも言われ、論文執筆に関わるとても大事な内容です。

第２に、研究上の問いから、研究目的を設定してください。研究上の問いはそのまま研究目

的として設定できる場合もありますし、そうでない場合もあります。情報教育に関する研究論文として適切な研究目的を考察してください。

第３に、研究目的に適した研究方法を選定してください。研究目的を達成するにはどのような研究方法が適するのかを考察してください。たとえば研究目的によって定量的、あるいは定性的な方法をとるのかが変わります。どちらの研究方法をとるにしても方法の妥当性と信頼性を担保するための参考文献を用いることが必要です。

以上の３観点は、課題１の内容とも関連し、どの認識論に基づくのかが大事なポイントです。研究上の問い、研究目的、研究方法の一貫性がとれるような研究デザインを考察することを求めます。

● 単位修得試験の評価基準

＊ 試験問題のポイントを適切に把握して記述しているか。

＊ 試験問題と関連する「レポート課題と学習ポイント」で示された内容を踏まえた解答になっているか。

＊ 参考文献や先行研究を用いて理由と根拠を示しながら考察されているか。

＊ テキストや参考文献からだけではなく、自身の考察を踏まえた論理展開になっているか。

●使用テキスト

1. 久保田賢一・今野貴之【編著】　『主体的・対話的で深い学びの環境と ICT　アクティブ・ラーニングによる資質・能力の育成』（新装版）　東信堂　2022
2. 野村康【著】『社会科学の考え方：認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会　2017
3. 大島 純・千代西尾祐司【編】『主体的・対話的で深い学びに導く学習科学ガイドブック』北大路書房 2019

●参考文献

1. Gergen, K. J., 【原著】東村知子【監訳】『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版 2004
2. 大島 純・千代西尾祐司【編】『主体的・対話的で深い学びに導く学習科学ガイドブック』北大路書房 2019
3. 高鍬 裕樹・田嶋 知宏「情報メディアの活用〔新訂〕」 放送大学教育振興会　2022
4. 箕浦康子（1999）.『フィールドワークの技法と実際―マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房
5. 箕浦康子（2009）.『フィールドワークの技法と実際Ⅱ―分析・解釈編』ミネルヴァ書房

科目コード	016400
科　目　名	授業特殊研究Ｄ（教育社会学）
担 当 教 員	須藤康介

●テーマ　教育社会学

学術界で一定のインパクトを有した教育社会学の研究知見を学び、さまざまな教育現象を、常識に捉われずに多面的に考察するスキルを身につける。現代および過去の学校の中で何が起こったのか。学校の外で何が起こったのか。両者はどう関係しているのか。教育の役割や課題、そして今後の在り方について社会学的に検討する。

●研究の視点

教育社会学の特徴は、①エビデンスの重視、②脱常識、③格差・不平等という視点、④現代の見取り図の提示にある。大学院生は、これらの視点を身につけるだけでなく、実際にこれらの視点に基づく研究を行えるようになることが期待される。

●レポート課題と学習ポイント

課題 1　テキスト『教育言説の歴史社会学』、または参考文献に示した 5 冊の中のいずれかを精読し、関連する先行研究を検討し、自らの考察を述べよ。

課題 2　テキスト『日本のメリトクラシー 増補版』、または参考文献に示した 5 冊の中のいずれかを精読し、関連する先行研究を検討し、自らの考察を述べよ。

テキストや先行研究の内容を要約しただけでは不可であり、テキストの内容と関係のない持論を述べても不可である。「〇〇という点について、自分は××だと考える。なぜなら……」のように、テキストの内容と先行研究をふまえた考察を論述する。自分の経験を根拠にするのではなく、さまざまな理論やデータに目を向けて議論することが求められる。課題 1 と課題 2 ともに参考文献の中から選ぶ場合は、異なる文献を扱うこと。

●単位修得試験の評価基準

論述問題を出題する。教育社会学の先行研究を学習しているか、教育現象を社会学的に考察することができているか、の二つの観点から評価を行う。

●使用テキスト

(1) 広田照幸 2001『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会。
(2) 竹内洋 2016『日本のメリトクラシー 増補版』東京大学出版会。

●参考文献

苅谷剛彦 2001『階層化日本と教育危機』有信堂。
志水宏吉 2002『学校文化の比較社会学』東京大学出版会。
中澤渉 2014『なぜ日本の公教育費は少ないのか』勁草書房。
本田由紀 2005『多元化する「能力」と日本社会』NTT 出版。
森田洋司 2000『「不登校」現象の社会学 第二版』学文社。

『教育社会学研究』『子ども社会研究』『社会と調査』『理論と方法』などに掲載されている論文は、関心があるものだけでも追うことが望まれる。

科目コード	016500
科　目　名	授業特殊研究Ｅ（教育心理学）
担 当 教 員	杉本明子

●テーマ　「教授・学習研究における心理学的アプローチ」

学校、職場、地域社会など様々な場面において、私たちは絶えず新しいことを学習し、また、状況に応じて他者に必要な事柄を教えるという活動に携わっています。このような教授・学習という活動における人間の行動と心的過程を科学的に解明しようとするのが心理学（特に、教育心理学・認知心理学）という学問です。

これまで、心理学の領域では、教授・学習に関わる様々なテーマ（生物学的基盤、発達、感覚、知覚、意識、記憶、言語、思考、動機づけ、感情、知能、人格、社会性、障害、測定と統計的方法など）に関して世界中で膨大な知見が蓄積されてきました。しかしながら、教授・学習に関して私達が取り組まなければならない研究課題は未だ多く残されています。

本講では、受講生が自分自身の研究テーマについて心理学的な観点から概観し、今後の研究計画を立案するための礎を作ることを目的としています。具体的には、受講生が（１）テキストで取り上げられているテーマ（章）のうち自分自身の研究テーマに関連する章を読み（さらに、関連研究をレビューし）、これまでどのような研究が行われてきて何が明らかにされてきたのか、自分の研究はどこに位置づくのか、自分の研究の意義は何かについて考察する、（２）自分の研究テーマに取り組んでいくためにはどのような研究方法を用いるべきかについて検討する、そして最終的には、（３）博士論文のプロポーザル作成の礎を作ることを目指しています。

●研究の視点

（１）教育心理学・認知心理学における代表的な研究テーマ・研究方法の理解
（２）自分自身の研究テーマに関する先行研究のレビュー
（３）自分自身の研究テーマ・目的に適合した心理学的研究方法の理解

●レポート課題と学習ポイント

課題１　『ヒルガードの心理学』と『認知心理学』で取り上げられているテーマ（章）のうち自分自身の研究テーマに関連する章を読み（必要があれば、これらの文献以外で関連する先行研究をレビューし）、これまでどのような研究が行われてきて何が明らかにされてきたのか、自分の研究はどこに位置づくのか、自分の研究の意義は何かについて考察しなさい。

課題２　『フィールドワークの技法と実際 - マイクロ・エスノグラフィー入門』（必要があれば参考文献やその他の文献）を読み、自分の研究テーマに取り組んでいくためにはどのような研究方法を用いるべきかについて検討しなさい。

課題１・２ともに、テキスト及び参考文献を参考にして、自分の研究課題の学問的位置づけと意義及び研究方法について考察してください。研究テーマ・課題は受講生が自由に選んで構いません。また、本講は、博士論文のプロポーザル作成の礎を作ることを目的としていますので、テキストや参考文献として挙げられている文献以外に関しても、積極的にレビューしてくださって結構です。

●使用テキスト

（１）内田一成（監訳）（2015）『ヒルガードの心理学 第 16 版』　金剛出版.

（２）箕浦康子（編著）（1999）『フィールドワークの技法と実際 - マイクロ・エスノグラフィー入門』　ミネルヴァ書房.

（３）箱田裕司・都築誉史・川端秀明・萩原滋（編著）（2010）『認知心理学』　有斐閣.

●参考文献

（１）平山満義（編著）（2006）『質的研究法による授業研究：教育学・教育工学・心理学からのアプローチ』　北大路書房

（２）遠藤健治（著）（2002）『例題からわかる心理統計学』　培風館

（３）兵藤宗吉・須藤智（編著）（2003）『認知心理学基礎実験入門』　八千代出版

（４）Levitin, D. J. (2002)　（編）『Foundations of Cognitive Psychology: Core readings』 The MIT Press.

（５）Carver, S. M. & Klahr, D. (2001)　『Cognition and Instruction: Towenty-Five Years of Progress』 Lawrence Erlbaum Associates.

（６）Anderman, E. & Anderman, L. H. (2009)『Psychology of Classroom Learning』(Volume 1 & 2) GALE Cengage Learning.

（７）Schiffrin, D, Tannen, D. & Hamilton, H. E. (2001)　『The Hangbook of Discourse Analysis』 Blackwell Publishers Ltd.

科目コード	016501
科　目　名	授業特殊研究Ｆ（教育行財政）
担 当 教 員	神林寿幸

研究テーマ　「教員の業務負担・労働環境をめぐる研究の到達点と教育行政学の展望」

2000 年代後半以降、日本では教員の長時間労働に対する政策的・学術的関心が高まり、日本の教育行政学でも教員の業務負担や教員の労働環境に関する研究が蓄積されてきた。

しかし、教員の業務負担・労働環境に関する研究といっても、その問題関心や分析枠組みは多岐にわたり、国家や文化的背景、国や地方公共団体の教育法規・政策、学校経営、教員個人のそれぞれに着目した研究がある。また、教育行政学を含む教育学以外の領域、例えば経済学、経営学、産業衛生学、産業・組織心理学の各分野でも、教員の業務負担・労働環境に関する研究が行われてきた。

このような教員の業務負担・労働環境研究の状況を踏まえて、本科目ではこれまでの関連する研究の到達点を確認し、教育行政学として教員の業務負担・労働環境に関する研究を進める意義について考察する。

研究の視点

（１）　教員の業務負担・労働環境について、これまで教育行政学や他の隣接学問分野でどのようなことが明らかにされたか。

（２）　公共政策学の「of の知識」「in の知識」がそれぞれ何を指すのか。あわせて、教員の業務負担・労働環境に関する「of の知識」と「in の知識」はそれぞれ何か。

（３）　領域学問としての教育行政学の強みと弱みとは何か。

（４）　領域学問としての教育行政学を発展させるために、今後教育行政学にはどのような研究や取り組みが求められるか。

レポート課題と学習ポイント

課題１　公共政策学は政策に関する知識を「of の知識」と「in の知識」と大別する。この「of の知識」と「in の知識」のそれぞれの観点から、これまでの教員の業務負担・労働環境に関する先行研究をレビューしなさい。

まず、テキストである秋吉・伊藤・北山（2020）を参照し、「of の知識」と「in の知識」がそれぞれ何を意味するのかを読み取る。その上で、次に、教員の業務負担・労働環境に関する「of の知識」と「in の知識」はそれぞれ何かを意味するのかを考える。これが整理できたうえで、関連する先行研究の知見を「of の知識」と「in の知識」のそれぞれに分類して、関連する先行研究をレビューし、これらが明らかにした知見を整理し論述すればよい。

なお、今回のレビューでは、教育行政学や教育学以外の学問分野（例えば、経済学、経営学、

産業衛生学、産業・組織心理学など）で行われた教員の業務負担・労働環境に関する研究も積極的に参照することを求める。過去の先行研究は神林（2017）が引用した図書や論文、下記の参考図書・論文などを参考にするとよい。ただ、拙著の出版以後も国内外で教員の業務負担・労働環境研究がさらに進んでいる。積極的に Google Scholar や CiNii Research で論文や図書検索をし、可能な限り多くの論文・図書を参照してもらいたい。

レポートを執筆する際には、先行研究の引用を適切に行い、当然のことであるが、レポートの末尾には引用文献リストをつけること（引用文献リストの文字数はレポート本文の文字数に含まない）。また、剽窃や生成 AI にレポートを執筆させる行為は著作権の観点からも不正行為に該当し厳禁とする。発覚した場合は厳正に対処する。

さらに、先行研究をレビューする際には、箇条書き的に先行研究を紹介する（「神林（2001）は、○○○を明らかにした。神林（2002）は、×××を明らかにした」のように書く）のではなく、トピックや概念ごとにまとめるとよい。例えば、「教員の業務負担増大の要因として、生徒指導（神林 2003；神林 2004）や部活動指導（神林 2005）が示されてきた」等の書き方が望ましい。

本課題を通して、受講生が教員の業務負担・労働環境に関する知見を深め、「学校の働き方改革」をはじめとする日本の教員の業務負担と労働環境について多面的に分析し、その現状と課題を考察できる能力を身につけることを期待する。

課題２　教員の業務負担・労働環境について、教育行政学以外で研究が進められる中で、教育行政学が当該研究を行う意義や強みと弱みはどこにあるか。それぞれについてあなたの考えを述べなさい。

教育行政学は「教育行政の学」、すなわち教育行政を対象に研究を進める領域学問であるという見解がある（例：市川 1992；青木 2011）。まず、「指定テキスト・論文」の（3）（4）（5）を熟読のうえ、教育行政学を領域学問として捉えた場合、教育行政学の強みと弱みにはそれぞれ何があるかを整理し現況するよい。その上で、次に教員の業務負担・労働環境に関する研究を発展させるうえで、教育行政学の強みを伸ばし、教育行政学の弱みを補うためにどのような研究に取り組めばよいかを考察し、これについて論じればよい。また、本課題を取り組むにあたって、場合によっては上記の課題 1 で言及したことも参考になるかもしれない。

なお、課題 1 と同様に、本課題でも、先行研究の引用を適切に行い、当然のことであるが、レポートの末尾には引用文献リストをつけること（引用文献リストの文字数はレポート本文の文字数に含まない）。また、剽窃や生成 AI にレポートを執筆させる行為は著作権の観点からも不正行為に該当し厳禁とする。発覚した場合は厳正に対処する。

本課題を通じて、教員の業務負担・労働環境をめぐる教育行政学の展望を考察できるようになり、教育行政学の発展に貢献してもらいたい。

使用テキスト・論文

（１）　秋吉貴雄・伊藤修一郎・北山俊哉（2020）『公共政策学の基礎〔第 3 版〕』有斐閣

（２）　神林寿幸（2017）『公立小・中学校教員の業務負担』大学教育出版

※紙書籍は絶版のため、電子書籍の購入もしくはお近くの図書館で借りてください。

（３） 市川昭午（1992）「教育行政学の対象領域と研究方法」『日本教育行政学会年報』(18), 3-18.
（４） 荻原克男（2003）「教育行政学の自己観察」『教育学研究』70(4), 579-587.
（５） 青木栄一（2011）「方法としての比較を用いたリノベーション」『教育学研究』78(4), 374-385.

参考図書・論文

（１） 高木亮（2015）『教師の職業ストレス』ナカニシヤ出版
（２） 高木亮・北神正行編（2016）『教師のメンタルヘルスとキャリア』ナカニシヤ出版
（３） McIntyre, S., McIntyre, T., & Francis, D. (2017). *Educator Stress: An Occupational Health Perspective.* New York: Springer. https://doi.org/10.1007/978-3-319-53053-6
（４） Hascher, T., & Waber, J. (2021). Teacher well-being: A systematic review of the research literature from the year 2000–2019. *Educational Research Review, 34,* 100411. https://doi.org/https://doi.org/10.1016/j.edurev.2021.100411
（５） Tsuyuguchi, K. (2023). Analysis of the determinants of teacher well-being: Focusing on the causal effects of trust relationships. *Teaching and Teacher Education, 132,* 104240. https://doi.org/https://doi.org/10.1016/j.tate.2023.104240
（６） Bannai, A., Ukawa, S., & Tamakoshi, A. (2015). Long working hours and sleep problems among public junior high school teachers in Japan. *Journal of Occupational Health, 57(5),* 457-464. https://doi.org/10.1539/joh.15-0053-OA
（７） Bannai, A., Ukawa, S., & Tamakoshi, A. (2015). Long working hours and psychological distress among school teachers in Japan. *Journal of Occupational Health, 57(1),* 20-27. https://doi.org/10.1539/joh.14-0127-OA
（８） 高原龍二（2014）「日本における公立学校教員の年齢・職務満足関係――教員労働組合員と民間労働組合専門職労働者の比較検討」『産業衛生学雑誌』56(4), 91-101. https://doi.org/10.1539/sangyoeisei.B13014

科目コード	016600
科　目　名	幼児教育特殊研究Ａ（保育）
担 当 教 員	齋藤政子

●研究テーマ

①「乳幼児の発達と保育」と②「教育・保育のあり方」を主要なテーマとしています。①については、学部で学ぶ発達理論の復習ではなく、最近の乳幼児期の発達に関する知見や教育思想について触れながら進めます。乳幼児期の言葉や認知・思考、自我の発達のプロセスなどを、おとなの意図的教育的働きかけとしての保育とのかかわりで学んでいきたいと思います。

また、②については、保育とは何か、教育とは何かという問題にも取り組んでいただきたいと思います。そもそも教育とは何か、教育はどうあるべきか、という問題について考え、教育における保育のあり方について論じるという方法もありますし、保育における教育の位置、つまり、保育は「教育と養護の一体的提供」であるという言葉がどういう内実を持っているのかについて、論じることもできます。

●研究の視点

今年度は、研究の視点は下記の３点に絞ります。

１．乳幼児期の発達と保育との関連について

２．保育方法・内容と日本の保育実践について

３．保育とは何か、教育とは何か

●レポート課題と学習ポイント

乳幼児期の発達理論、教育理論双方から課題に迫っていきたいと思います。多くの文献に目を通すことも必要ですが、古典的な文献をじっくり読むことも大事です。理解不能の箇所はそのまま素通りしつつ、とにかく読み続けてみましょう。閃くところがきっとあるはずですので、その部分と自分のテーマとの関連を考察してみるとよいと思います。

また、拙著『子どもとつくる４歳児保育』は４歳児保育のあり方についてまとめたものですが、第一部の理論編は、子どもの発達の捉え方、保育とは何かという問題への切り込み方の参考になると思いますし、第二部の実践編は、その理論をどう具体化するかについてわかりやすくまとめられたものですのでぜひご一読をお勧めします。

課題１　おとなが、子どもの成長・発達に、どうかかわっていくかという問題について論じなさい。その際、ご自身のフィールドに合わせ、保育・育児のどちらかを選んでください。

課題２　どちらかひとつを選んでまとめなさい。

①保育の方法の展開と保育実践との関連について検討し、保育の在り方を論じなさい。
②フレイレのいう「教えるということ」の内実を幼児教育にひきつけて論じなさい。

●使用テキスト：

（1）齋藤政子　編著　『子どもとつくる４歳児保育』　ひとなる書房　2016
（2）秋田喜代美監修　山邊昭則・多賀厳太郎編著　『あらゆる学問は保育につながるー発達保育実践政策学の挑戦―』　東京大学出版会　2016
（3）パウロ・フレイレ著　三砂 ちづる訳『被抑圧者の教育学　50 周年記念版』　亜紀書房　2018

●参考図書

（1）やまだようこ著『ことばの前のことば』　新曜社
（2）青木秀雄編著『第２版　教職入門-専門性の探究・実践力の錬成』　明星大学出版部　2017
（3）ルビンシュテイン著　秋元春朗ほか訳『一般心理学の基礎４』　明治図書
（4）ドナルド・ショーン著　佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵』　ゆみる出版
（5）パウロ・フレイレ著　里見実訳　『希望の教育学』　太郎次郎社
（6）大日向雅美　著『新装版　母性の研究　その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証』日本評論社　2016
（7）マーガレット カー（著），大宮 勇雄・鈴木 佐喜子（翻訳）『保育の場で子どもの学びをアセスメントする―「学びの物語」アプローチの理論と実践』ひとなる書房　2013

科目コード	016701
科　目　名	幼児教育特殊研究Ｂ（音楽教育）
担 当 教 員	板野和彦

●テーマ　「音楽教育における理論と実践：ジャック=ダルクローズを手がかりとして」

教育現場における音楽教育はこの数十年間で大きな変化をとげてきました。まず、取り上げる音楽そのものが変化してきたことを指摘する必要があります。ポピュラー音楽の台頭、日本の伝統的な音楽を含む諸民族の音楽が重視されるようになってきたこと、デジタル機器が導入されたことによる変化などはいずれも大きな転換を引き起こした要素です。そして、これら音楽の変化と平行して、これを受け止める子どもたちにも大きな変化があったと考えられます。少子化や家族の状況の変化による気質の変化、音楽は学ぶものというより楽しむものであり表現するものであるという捉え方の広がりなど、大きな変化が見られます。音楽教育に携わる教員はこのような変化を知り、それに対応してより良い音楽教育を展開してゆく必要があります。そしてそのためには音楽教育の目指すもの、理想とする子ども観、つまり音楽教育によってどのような子どもを育てたいのか、という教育理念について考えてゆく必要があります。

本研究でリトミックの創案者であるジャック＝ダルクローズを取り上げる理由は、彼の教育法であるリトミックが、音楽教育において身体運動を活用したユニークな教育法であったということに加えて、その教育理念が様々な変遷を経て、明確なかたちで提示されているからです。学生たちに和声学を指導する音楽教師としてそのキャリアを始めたジャック＝ダルクローズは音楽を聴き取ること、リズム、身体運動などに着目しながら音楽的な技術を身につける教育から、学習者の人間の一般的な諸能力を高める教育へと目指すところを高めてゆきました。

今回取り上げる『リズムと音楽と教育』はジャック＝ダルクローズが自身の音楽教育法を確立した時期に著された、彼の主著であり、「音楽教育において何を目指すのか」ということが明確にされています。音楽教育研究では、指導法や教材など実際的な側面が強調される傾向があり、またジャック＝ダルクローズの教育法であるリトミックにおいても「体験することによって学ぶ」という側面が強調されがちですが、ジャック＝ダルクローズをはじめとした音楽教育家たちの教育理念について学ぶことは、私たちが現代の日本における音楽教育を考える際に、その基礎となるものであると考えることができます。

●研究の視点

（１）現在の音楽教育の動向についての理解
（２）音楽教育史におけるジャック＝ダルクローズの位置づけ
（３）ジャック＝ダルクローズの教育理念および実践的内容の理解
（４）ジャック＝ダルクローズの思想が日本の音楽教育に及ぼした影響の検証
（５）理論と実践の関連への関心の深まり

●レポート課題と学習ポイント

課題１　ジャック＝ダルクローズ著『リズムと音楽と教育』の任意の１章を精読し、ジャック＝ダルクローズの見解に対する自分の考えを述べなさい。

ここで指定した『リズムと音楽と教育』はリトミック音楽教育法の指導内容の解説ではなく、彼の音楽教育についての考え方を述べたものですから、ある種のマニュアルとはその読み方が大きく異なります。さらに日本ではあまり馴染みのないリズム用語が多用されていたり、具体的な音楽の内容と抽象的な内容が連続している部分などもあり、読みやすいとは言えません。しかし、そこには教室で子どもたちや学生たちを指導しながら身体運動を活用した音楽教育法を確立した作曲家、演奏家、そして音楽教育者であった彼の教育観が明確に示されています。

ご自分で任意の章を選択していただきたいと思いますが、第１章の前にある序章もその選択の中に加えてください。これはすべての章を書いた後でジャック＝ダルクローズがまとめとして書いたものですので包括的な内容が示されています。また第１章は彼の教育の基本となった、音を聴き取ることに重点をおいて書かれています。第２章は学校で教えられている内容についての見解が示されており、第４章は音を聴き取ることとリズムに関する学習の関連性について書かれています。

ジャック＝ダルクローズを肯定する見解であれ、批判する見解であれ、自由に論じてください。

課題２　テキスト『音楽教育メソードの比較』の終章「特定のメソードを選ぶか折衷主義をとるか？」を読み、20 世紀に創案されたいくつかの音楽教育メソードの理念、原理、実践方法などについて、様々な角度から論じてください。

深く検討するためには終章以外の章も精読する必要がありますが、身体運動や歌唱など、音楽教育をさまざまな側面から検討し、またさまざまな地域で活用されたこれらのメソードについて自分の実践経験とも関連させて論じてください。

●使用テキスト

（１）ジャック＝ダルクローズ　著　『リズムと音楽と教育』（初版　2003）全音楽譜出版社

（２）L.チョクシー　他著『音楽教育メソードの比較―コダーイ、ダルクローズ、オルフ、C・M』　（2016）　全音楽譜出版社

（３）マルタン　他著　『エミール・ジャック＝ダルクローズ』（初版　1977）全音楽譜出版社

●参考文献

（１）ジャック＝ダルクローズ著『音楽と人間』（2011）開成出版

（２）リング他著『リトミック事典』（2006）開成出版

（３）山名淳著『夢幻のドイツ田園都市』（2006）ミネルヴァ書房

科目コード	016700
科　目　名	幼児教育特殊研究Ｄ（児童文化）
担 当 教 員	羽矢みずき

●テーマ「児童文化財の研究」

様々な児童文化財の中で、保育・幼児教育の現場や家庭教育との関わりの深い絵本をとりあげ、作品の表現や構造に即した分析と、子どもがそれをどう享受するかということについての観察と考察を通して子ども理解を深め、幼児の読書の特質を見極めます。

●研究の視点

（１）様々な児童文化財とは異なる絵本固有の表現の特質
（２）絵本の作品研究
（３）絵本と子ども読者の関わり
（４）幼児の読書の特質

●レポート課題と学習ポイント

課題１

子どもに読み聞かせたい絵本を１冊選び、その作品研究をしなさい。あわせて、どうしてその絵本を読み聞かせたいのか説明しなさい。

子どもたちに読み聞かせる絵本を選ぶには、まず、自分が多くの絵本に触れる必要があります。絵本に出会う手引きとしては、参考文献（１）日本子どもの本研究会絵本研究部編『えほん こどものための 500 冊』、（５）『えほん こどものための 300 冊』などを参考にしてください。（４）鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史』などによって、絵本の歴史を理解しておくことが大切です。

子どもたちに読み聞かせたい絵本１冊を選んだら、実際に読み聞かせる前に、とりあげる作品について十分に研究しておくことが必要です。作品研究は、その絵本を作った絵本作家の他の作品もひと通り読み、その作家の描こうとしているテーマをつかむことから始めます。また、どうしてその絵本を子どもたちに読み聞かせるのかという自分なりのモチーフを形成して、子どもたちのいる場に臨んでほしいと思います。

絵本の作品研究の方法については、テキスト（１）村中李衣『絵本の読みあいからみえてくるもの』、（２）松岡 享子『子どもと本』を参考にしてください。

課題２

作品研究をした絵本を、幼稚園、保育所、児童館、地域・家庭文庫などの場で実際に 読み聞かせて、子どもたちの様子を観察しそれを記述しなさい。また、その観察を通して幼児の読書のあり方の特質についても考察しなさい。

絵本を読み聞かせたときの子どもたちの様子を観察し、それについて考察するためには、ビデオ撮影をするのもよいでしょう。読み聞かせのときの子どもの反応としては、言葉によるものだけではなく身体的なものも予想されるからです。撮影したビデオを繰り返し見ることで、様々な発見があるでしょう。
作品研究を通して自分が捉えたものと、読み聞かせたときの子どもたちの反応には、何らかのズレがあるかもしれません。そのズレが幼児の読書の特質を考えるきっかけになるはずです。考える中で、幼児の読書のあり方に関して何らかの仮説を立てることができたなら、その仮説を検証するために、さらに読み聞かせを重ねる必要があります。子どもたちの様子を観察しながら考察を深めていく方法と、絵本と子どもの関わりについては、参考文献（２）（３）の村中李衣の著書にヒントがあります。

●使用テキスト
（１）村中 李衣『絵本の読みあいからみえてくるもの』ぶどう社　2005 年
（２）松岡 享子『子どもと本』岩波新書　2015 年

●参考文献
（１）日本子どもの本研究会絵本研究部編『えほん 子どものための500 冊』一声社
1989 年
（２）村中李衣『子どもと絵本を読みあう』ぶどう社　1993 年
（３）村中李衣『読書療法から読みあいへ―「場」としての絵本―』教育出版　1998 年
（４）鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史』Ⅰ～Ⅲ、ミネルヴァ書房 2001 年～2002 年
（５）日本子どもの本研究会絵本研究部編『えほん 子どものための300 冊』一声社
2004 年

科目コード	017000
科　目　名	障害児者教育特殊研究Ｂ（障害児者自立支援）
担 当 教 員	島田博祐

●テーマ　「障害児者のＱＯＬ（生活の質）と生涯学習支援」

従来の障害児教育は、「障がいを持っていてもできるだけ日常生活に不自由しない能力を身につけること」を主眼としたADL（日常生活動作）面重視のものであったが、ノーマリゼーションの理念に基づき、「障がいを持っていても各種の制度や施設などの社会資源を有効に利用しながら生活を楽しむ」といったQOL（生活の質）面重視の観点が必要になってきている。

障害児者の社会参加に向けての支援モデルに関しても、当事者の能力開発・向上を重視するAbility(個人能力）Model から環境調整やナチュラルサポートに基づく付加支援を重視するStrength（相互作用）Modelへの転換が図られてきている現状がある。

障害児が学校卒業後も支援を受けながら可能な範囲で社会的に自立し、充実した生活を送るためには、個人のニーズに応じ且つ社会的妥当性が高い学齢期以後も見据えたカリキュラムを作成、実行することが不可欠である。

また学齢期以後の生涯学習支援として、大学など高等教育機関のバリアフリー化もあげられる。具体的には身体障害を持つ学生に対する支援サポート体制作り、知的障害者を対象としたオープンカレッジなどの試み等である。2001年にＷＨＯから出された国際障害分類（ＩＣＦ）において、社会参加の側面が重視されており、選択の幅を狭くされることを余儀なくされていた障害児者にとって学ぶ機会を提供することは、まさに社会参加とエンパワメントにつながると考える。

最後に障害児者に対する教育だけでなく、周囲の人間が障害を理解するための教育（障害理解教育）や社会づくりも課題となり、それには福祉・医療・労働・司法など様々な隣接領域との連携が不可欠である。

上記の観点を踏まえた上で、本講ではより専門性が高い博士課程であることを考慮し、一応の指針として以下に研究の視点を提示するが、上記の観点を踏まえた上で自身の研究課題との結びつきにおいて自由に論じていただきたいと考える。

●研究の視点

（１）障害児者の生涯発達支援を見据えた支援
（２）就学前・就学中・学齢期後を結ぶ移行支援
（３）高等教育のバリアフリー化
（４）生涯学習と支援について―社会参加の観点から
（５）障害児者の潜在的可能性（例：芸術・スポーツ分野など）を引き出す周囲の支援

●レポート課題と学習ポイント

上記（1）～（5）の例題を参考に、自身のテーマと関係する項目を２つピックアップし、自由に論じていただきたい。

●使用テキスト

（1）小林繁著　『障害を持つ人の学習権保障とノーマリゼーションの課題』　れんが書房新社　2010

（2）マグナス家族編　高橋亮・島田博祐監訳『ある家族の愛の物語』　文化書房博文社 2004

（3）下妻晃二郎/能登真一　臨床･研究で活用できる！QOL 評価マニュアル　医学書院　2023

（4）小林亜津子著　QOL ってなんだろう？　ちくまプリマー新書　2018

●参考文献

（1）ロイブラウン編著　『障害をもつ人にとっての生活の質』　相川書房　2002

(2) R.L.Schalock　Quality of Life: Applications for People with Intellectual and Developmental Disabilities AAIDD

（3）梅永雄二・島田博祐・森下由規子編著　『みんなで考える特別支援教育』北樹出版　2019 注）博士前期課程で使用

（4）冨永光昭著　『小学校・中学校・高等学校における新しい障害理解教育の創造』　福村出版　2011　注）博士前期課程で使用

（5）上田敏　『ＩＣＦの理解と活用』　萌文社　2005　注）博士前期課程で使用

（6）Quality of life 研究会　QOL 学を志す人のために　丸善プラネット

（7）オープンカレッジ東京運営委員会編　『知的障害者の生涯学習支援―いっしょに学びともに生きる』　東京都社会福祉協議会　2010

（8）国立特殊教育総合研究所編　『発達障害のある学生支援ガイドブック』　ジアース教育新社　2005

（9）橋本和明編著　『発達障害と思春期･青年期 生きにくさへの理解と支援』明石書店　2009 年　注）博士前期課程で使用

(10) 古荘純一・柴田玲子・根本芳子・松嵜くみ子 『子どもの QOL 尺度 その理解と活用』診断と治療社　2014

(11) 小林繁・松田泰幸(編集)、「月刊社会教育」編集委員会　『障害をもつ人の生涯学習支援　インクルーシヴな学びを求めて　24 の事例』　旬報社　2021　注）博士前期課程で使用

(12) 村山伸子、藤井誠二他編著　『QOL と現代社会――「生活の質」を高める条件を学際的に研究する』 2017　明石書店

科目コード	017100
科　目　名	障害児者教育特殊研究Ｃ（小児保健）
担 当 教 員	星山麻木

●テーマ 「障がいのある子どもとその家族への支援」

障がいのある子どもとその家族への支援をテーマに課題と将来への展望について考察します。教育、福祉、医療との連携、或いは連携を促すための実践的な支援方法や工夫など、自ら課題を見つけ、考察を深めます。講義と演習を交えて知識と実践力を深め、自らの知と感性を磨きます。先行研究の紹介、討論、プレゼンテーション、実技などを通じて、保護者や支援者に対する実際的な支援に対する考察を深めます。

●研究の視点

（1）障がいのある子どもとその家族をテーマに課題を見つける
（2）自らの立場と社会的な役割から、将来への展望を考える
（3）保護者と支援者に対する支援について

●講義計画

1　オリエンテーション
2　障がいのある子どもとその家族に対する理解と支援方法
3　現在の課題と連携の在り方に対するプレゼンテーションと討論
4　音楽や動きを通じての体験
5　障がいのある子どもとその家族への支援と将来への展望

課題　現在置かれている自らの立場や社会的役割を考えながら、障がいのある子どもや保護者に関する支援の課題について、考察しなさい。

教育に関わる人すべてに関連すると思われる特別な支援を必要とする子どもと保護者に対する支援について、考察してください。テーマはなるべく焦点を絞り、ご自分の興味のあるものを選択してください。現在のご自分の立場や社会的役割を考え、その課題について、社会に対する提言として、論じてください。【2 種類（2 通）のレポートを作成】

●使用テキスト

（1）村瀬嘉代子　『こどもと家族への統合的心理療法』金剛出版　2001
（2）星山麻木　『この子は育てにくい、と思っても大丈夫　～生まれてきてくれて、ありがとう　子どもに伝えたいあなたのために』　河出書房新社　2017

（3）星山麻木　『障害児保育ワークブック　―インクルーシブ保育・教育をめざして』　萌文書林　2019

●参考文献

（1）小宮三彌　他『障害児発達支援基礎用語辞典』川島書店 2002
（2）竹田契一　他『幼児期軽度発達障害児への支援』発達 97 ミネルヴァ書房 2004
（3）東京 IEP 研究会　『個別教育・援助プラン』　安田生命事業団 2000
（4）藤崎眞知代　他　『育児・保育現場での発達とその支援』　ミネルヴァ書房 2002
（5）本城秀次　編他　『就学相談と特別支援教育』　こころの科学 124 日本評論社 2005
（6）文部科学省　『児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン』
東洋館出版社 2004
（7）杉山登志郎　『「ギフテッド」天才の育て方』　学研教育出版 2009